

主 題：夜ごと涙ながらに捧げる祈り

聖書箇所：詩篇 6篇

テーマ：主の懲らしめを受ける時に捧げる祈りとは？

今朝、私たちがともに学びたい神様のみことばは詩篇6篇です。聖書をお持ちの方はどうぞそお開きください。

詩篇6：1-10

- :1 主よ。御怒りで私を責めないでください。激しい憤りで私を懲らしめないでください。
- :2 主よ。私をあわれんでください。私は衰えております。主よ。私をいやしてください。私の骨は恐れおののいています。
- :3 私のたましいはただ、恐れおののいています。主よ。いつまでですか。あなたは。
- :4 帰って来てください。主よ。私のたましいを助け出してください。あなたの恵みのゆえに、私をお救いください。
- :5 死にあっては、あなたを覚えることはありません。よみにあっては、だれが、あなたをほめたたえるでしょう。
- :6 私は私の嘆きで疲れ果て、私の涙で、夜ごとに私の寝床を漂わせ、私のふしどを押し流します。
- :7 私の目は、いらだちで衰え、私のすべての敵のために弱まりました。
- :8 不法を行なう者ども。みな私から離れて行け。主は私の泣く声を聞かれたのだ。
- :9 主は私の切なる願いを聞かれた。主は私の祈りを受け入れられる。
- :10 私の敵は、みな恥を見、ただ、恐れおののきますように。彼らは退き、恥を見ますように。またたくまに。

前回、私たちは詩篇5篇から祈りについて学びました。ありもしない誹謗中傷を受け、嘘や偽りを浴びせられ、大きな苦難の中にいたダビデが朝明けに主の前に静まって祈りを捧げていました。私たちはこのダビデの祈りの姿を通して、自身の生活においてどのような態度で祈るべきなのか、誰に対して祈っているのか、祈りの原動力とは何か、そして祈りのもたらす確信について学ぶことができました。敵が迫り、自分の手には負えないようなさまざまなものによって心が苦しめられ、悲しみの中に置かれていたダビデが祈りを通してどのように希望を見出すことができたのかをみことばは教えてくれました。

さて、今回私たちが見るこの詩篇6篇からも前回と同様にクリスチャン生活における祈りについて学ぶことができます。私たちはここでも再び非常に大きな苦しみと悲しみの中に置かれているダビデを目撃することになります。しかし、今回この6篇に登場するダビデが苦しみを経験していたのは、これまでとは異なる理由によってでした。それは彼自身の罪とそれに対する主の懲らしめが原因だったのです。実はこの詩篇6篇は初代教会の時代から“悔い改めの詩篇”と呼ばれる7つの詩篇のうちの一つとして扱われています。レジメにも記しておきましたが、詩篇6、32、38、51、102、130、143篇が“悔い改めの詩篇”として挙げられます。そしてこれらの詩篇に共通して見ることができるものは、罪を犯した者が、懲らしめられる聖い神に対して罪を告白し、赦しを求める姿です。確かに私たちがこれから見ていく詩篇6篇の中には具体的な罪の告白や悔い改めのことばは記されていません。しかし、ほかの悔い改めの詩篇と同じように、ここから私たちは大切な真理を学ぶことができます。それは主の懲らしめを受ける罪を犯した者が大きな悲しみの中でどんな祈りを捧げることができるのかということです。

そして私たちにもこのような詩篇は必要です。なぜなら私たちも皆例外なく罪を犯し、それによって大きな苦しみを経験することがあるからです。また何より罪人である私たちが聖さを求めて自分のうちの罪と闘う時に、必ず主の懲らしめを経験するからです。ヘブル12：7-8は「訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。」と言っています。このみことばが教えるように、私たちがキリストによって救われ、神の子どもとされているのであれば、私たちの霊の父である神は子である私たちに訓練されるということです。時に、その訓練は大きな痛み、大きな悲しみを伴います。自分の罪が原因で主の戒めを受け、涙がとまらず、体や心が弱り切り、どうしようもないような、そんな悲しみに苛まれることを私たちは味わうことがあります。

☆ **ダビデの三つの叫び**

ではそんな悲しみに置かれた時、私たちはどのようにして祈ることができるのでしょうか？私たちが悲しみの中に置かれた時にどのようにそこに助けを求め、希望を見出すことができるのでしょうか？そのことをこの詩篇6篇を通して、ともにダビデから学んで行きましょう。特に私たちはこの詩篇の中で主の懲らしめを受け、ひどい苦しみの中でダビデが記した三つの心の叫びを見ることができます。今このメッセージを聞いている方の中に、もしかすれば主の懲らしめによって非常に大きな悲しみを覚えている方がおられるかもしれません。またこれから先、私たちは主の懲らしめを経験し、そのことで大きな悲しみを体験することもあるでしょう。どうかそんな時、この詩篇のみことばを思い出してください。たとえどんなに大きな試練があったとしても、そこには必ず希望があることを私たちの主は教えています。このみことばが皆さんの心の励ましになることを心から願っています。

1. 主のあわれみを求める叫び 1-3節

さて、まず1-3節の中にダビデの主のあわれみを求める一つの叫びが記されています。ダビデはまず1節「主よ。」ということばでこの詩篇を始めました。一体どうしてそのようなことばを用いたかという、それはひどい苦難の中にあつた彼が、なぜ自分が苦しみに遭っているのか、また誰がその苦しみを自分にもたらしめているのかをよくわかっていたからでした。また同時に、彼は自分の抱えている深刻な状況を解決することができる方がたったひとり、主だけであることもよくわかっていました。だからこそダビデはどこでもない、誰でもない、自分と個人的な関係を持っている主に自分の心のうちを打ち明け始めるのです。

そして続いて、彼はこのように主に対して訴えています。「御怒りで私を責めないでください。激しい憤りで私を懲らしめないでください」と。ここで注意してほしいことは、ダビデは自分が主の懲らしめに値しないのだと不満を口にしているのでも、主の懲らしめ自体をやめてくださいと願っているわけでもないということです。彼は「御怒りで私を責めないでください。激しい憤りで私を懲らしめないでください」と言いました。ここで用いられている二つの動詞、「責め」る、「懲らしめ」るということばはどちらも罰を与えるということよりも、間違いを犯した者に対して正しい教えを与えよとか、正しい道へ引き戻すために訓戒を与えるという意味を持っています。ですからここでダビデはひどい苦しみに自分が置かれているのは、自分の過ちが原因であること、そしてその主の「懲らしめ」が自分に値するのは当然であることをわかっていたのです。しかし、そのことを理解していた彼も燃える怒りで主が懲らしめられることをやめてくださいと主に願っています。エレミヤ10：24にも同じような表現が使われています。「主よ。御怒りによらず、ただ公義によって、私を懲らしてください。そうでないと、私は無に帰してしまふでしょう。」と。ダビデは主の戒めが余りにも厳しく、その戒めによって限界に追い込まれ、いのち絶え絶えになっていたがゆえに主にこう懇願するのです。主よ、私は確かにあなたの懲らしめに値する愚かな者です、しかしどうか燃える怒りで私をこれ以上責め立てることをやめてくださいと。そしてダビデは怒りのかわりに本来自分にはふさわしくないあわれみを示してくださるようにと主に求めています。

2節に「主よ。私をあわれんでください。私は衰えております。主よ。私をいやしてください。私の骨は恐れおののいています。私のたましいはただ、恐れおののいています。」と続きます。ダビデは繰り返し自分自身が「恐れおののいて」いる状態であることを主の前に言い表していました。彼はここで特に「私の骨」、「私のたましい」という表現を用いています。この「骨」というのはダビデという人物を形作るもの、ダビデ自身の肉体、からだのことを指しており、また「たましい」というのはダビデの外側ではなく、内側の部分、心や感情といった精神的な部分を表すことばが用いられています。要するにダビデは肉体も精神も彼のすべてが主の懲らしめによって弱り切り、衰え果てていると主に訴えるのです。多くの人はこの時のダビデはひどい病にかかり、床から起き上がることもできないひどい状態にあったと考えています。ダビデは死が迫るほどひどく弱っていました。ダビデのこのような様子を想像できるのではないかと思います。重い病気にかかってダビデはただからだに蝕まれていくだけでなく、その余りの痛さに、余りのからだの苦しみに心までもが元気を失っていくのです。余りの痛みに涙を流し過ぎて目も疲れ果て、いつまで続くかわからない自分のうちにある苦痛で不安や恐れが大きくなり、絶望が心の中を支配していくのです。そして挙句、主が自分に対して怒りを燃やしているように、主が自分に向かって立ち上がっているかのように感じていたのです。彼は本当に疲れ切り、弱り切っていたのです。そんな苦しみに押しつぶされそうになっていたダビデはかろうじてこのようにつぶやきます。3節の最後に「主よ。いつまでですか。あなたは。」と。痛みで弱り切り、不安で押しつぶされ、苦しんで衰えた彼にできたことは「主よ」、いつになったらこの状況にある私を顧みてくださるのですか、そのあわれみを求める心からの叫びだけでした。

さて、皆さんはこのようなダビデと同じような状況に置かれたことがあるのでしょうか？心が自分の犯した罪によって責められ、その罪の責めによって平安がなくなってしまう。まるで主が自分に対して怒

りを燃やし、自分を見捨てて遠く離れてしまったかのように感じ、恐れを抱いてしまう。私たちは日々の生活を過ごすに当たって、さまざまな試練を経験します。ダビデのように病気にかかることもあります。予想もしていなかった悲劇に見舞われることも、涙がとまらないような苦しみを味わうこともあります。余りの痛みと苦しみで弱り切り、「主よ」、いつまでこんなことが続くのかというようなことを口にしたことがある方もおられると思います。もちろん私たちが日々経験するすべての試練が私たちが直接罪を犯したことが原因でもたらされるわけではありません。しかし、私たちがこの罪に汚染されている世界に住み、自分自身も罪人として生きていれば、さまざまな苦しみ、さまざまな試練といったものを必ず経験するのです。ここに例外はありません。

しかし、問題は私たちがこのような試練を経験する時に、このような苦しみに遭う時に、その中でどのように振る舞っているのかということです。皆さん、自分の歩みを振り返ってみてください。ダビデの罪を懲らしめた聖く正しい神は、今も変わらず聖く正しい神です。そしてこのような聖い神だからこそ救いを得た私たちにもご自分に似た聖い者へと変わっていくことを命じておられるのです。私たちもよく知っている I ペテロ 1 : 16 の中に「それは、『わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。』と書いてあるからです。」とあります。だからもし私たちが罪を犯したにもかかわらず、心のうちに罪があるにもかかわらず、罪を告白して悔い改めることをしないのであれば、神はその私たちの罪を認めさせ、聖になることができるように懲らしめを与えられる、そんな神だということです。ヘブル 12 : 5-6 の中には「そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていきます。『わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。』」と書かれています。もちろん間違っただけでほしくないのは、主の懲らしめは私たちに対する主のさばきではないということです。主イエスを信じ、罪を赦された者はもうさばかれることはありません。そのようなすばらしい約束が私たちには与えられているのです。この主の懲らしめは主が私たちを愛しておられる証しです。私たちが救いを得て、神の子どもとされているその証しとして私たちに与えられるものだということです。

同じことを箴言 3 : 11-12 の中に「わが子よ。主の懲らしめをないがしろにするな。その叱責をいとうな。父がかわいがる子をしかるように、主は愛する者をしかる。」と記されています。私たちに救いを与えてくださった聖い神は、今も変わらず私たちに愛を注ぎ続けてくださっているのです。そして、この神は私たちを愛してくれているがゆえに、私たちを愛する子どもとして扱ってくれているがゆえに、私たちが聖い者へと変わることができるように、私たちのうちにある罪や汚れを取り除こうとされるのです。ある人にとってはそれは心の中にある偶像かもしれません。お金であったり、仕事であったり、家族であったり、健康であったり、この世には私たちの目をキリストから奪ってしまうようなものが数多くあります。救われた後もかつて自分が宝としてきた心の偶像に私たちがしがみつき、本来見るべき主を忘れてしまうことがあります。だからこそ主はそのような時に、そういったものを私たちのうちから取り除こうと試練を与えて、そのようなものを取り上げ、主だけに目を向けるように懲らしめを与えることがあるのです。またある人にとっては、それはプライドかもしれません。自分の中で譲れないもの、自分の中で長年培われてきた価値観や基準を私たちは皆持っていたりします。私たちは知らず知らずのうちにみことばに従うことよりも、自分の考えに基づいて、自分の思いどおりに事を進めようとしてしまいます。だからこそ自分の意見が通らないことがあった時、自分の思いが受け入れられなかった時に怒りを持ったりすることがあります。また自分の思いどおりに行かなくなって問題が起こった時に真っ先に自分の内を見ることよりも、ほかの人に問題がないかを考えることがあるのです。そして自分の基準にほかの人が反しているのであれば、そのことを許せないという思いを抱くこともあるのです。

主は私たちのうちに根付いているこういったプライドを砕き、謙らせるために懲らしめを与えることがあるということです。主は私たちの周りの人や環境や状況を用いて、私たちのプライドを打ち砕くことがあります。私たちが一番信頼している人、愛している家族を用いて、私たちのうちにある問題に向き合わせる場合があります。そして多くの場合、自分に近い者に罪を責められると反発したり、その罪と向き合うことに難しさを覚えたりします。私たちの中にあるプライドが問題だと、神は試練を用いてそのプライドを除こうとされることもあります。主は私たちが罪と向き合い、そして聖くなっていくために試練を用いられるお方です。そしてそのような試練は私たちのどこが欠けているのか、どこが成長しなければいけないのか、私たちの心の隅々を知っている神が私たちを愛するがゆえに訓練として与えるものなのです。

だとすれば、問題は私たちひとりひとりがこの神様の意図を覚え、自分の心にある問題と真剣に向き合っているかということです。どうでしょう？あなたは主があなたのこの部分を成長させなければいけないと指摘した時に、勝手に、いや、私のうちではこのような罪は問題ない、大したことではないと軽く扱っていないでしょうか？私たちはいつも聖い神が見られるように、自分の罪を見、この神が求めて

いる聖さを追い求めているのでしょうか？それとも自分の勝手な基準に基づいてこの次は大丈夫、そんな深刻な問題ではない、そのように主の懲らしめを軽んじていないのでしょうか？また確かに主の懲らしめは痛みを伴うものです。しかし、生まれながらに罪人である私たちがキリストに似た者になっていこうとする、聖い者になっていこうとする時には当然痛みが伴うのです。しかしそのような痛みが余りにも厳しいがゆえに、そのような悲しみを受けたくないがゆえに主の懲らしめを拒んだりしていませんか？私たちの成長を願う神が、愛の訓練として与えようとされいるその試練を、自分には厳し過ぎる、苦痛過ぎると不満を口にしてはいませんか？私たちもよく知っていること、それは多くの場合、私たちがすべてのものを失い神だけに集中する時に、神だけしか私たちのうちに残されていない時に、私たちはこの素晴らしい神の恵みを、この素晴らしい神の守りの力を、この素晴らしい偉大な神の主権のわざを知ることができるということです。

もし私たちが主の愛を忘れ、懲らしめの苦しみだけに目を向けるのであれば、私たちの心から喜びや平安は失われていきます。しかし、私たちが主の懲らしめを聖くなるための訓練だと思って耐え忍び、そして聖さを追い求め続けていくのであれば、必ずそれは正しい実を結ぶことにつながります。先ほどから見ているヘブル12：11の中に「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」と書いてあります。ダビデは主の懲らしめを受け入れ、主のあわれみを求めながらも自分の罪と向き合っていました。私たちはこの主の懲らしめにどのように向き合うのでしょうか？

2. 主の救いを求める叫び 4-7節

続いてダビデの二つ目の叫び、主の救いを求める叫びが4-7節に記されています。もう一度4節を見てください。「帰って来てください。主よ。私のたましいを助け出してください。あなたの恵みのゆえに、私をお救いください。」と書かれていました。主の懲らしめの中でもがき、神に見捨てられたかのように感じていたダビデはこの神がいま一度自分のもとに帰って来てくださること、そして自分を苦しみから救い出してくださることを求めています。

1) 主に救いを求める二つの理由

そして特に彼はここで二つの理由を挙げて主が救いを自分に与えてくださるようにと願っています。二つの理由がここに記されています。

(1) 主は恵み深い方だから 4b節

まず一つ目の理由が4節の続きに書かれていました。「あなたの恵みのゆえに、私をお救いください。」、主に救いを求める一つ目の理由は主は恵み深い方だからです。今のことをよく考えてみてください。ダビデは「あなたの恵みのゆえに、私をお救いください。」と言いました。ダビデが置かれていた状況は、言うまでもなくひどいものでした。主の懲らしめを経験し、余りの痛みで自分のいのちまでもが脅かされていたのです。しかし、そんな苦しい状況、自分の手には負えない状況の中であって、ダビデはどこに希望があるのかをよくわかっていました。彼は自分をこの絶望的な状況から救い出すことができる唯一の希望がどこにあるかをよく知っていました。そしてそれこそが主の「恵み」であると彼はよくわかっていたのです。私たちもよく知っているこの主の「恵み」、これは聖書で頻りに主との契約、またその契約に対する主の誠実さとともに用いられています。

申命記7：9の中に「あなたは知っているのだ。あなたの神、主だけが神であり、誠実な神である。主を愛し、主の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られるが、」とあります。ダビデは自分に懲らしめを与えられているお方がかつて自分を王にするという契約を結んだ方であること、またこのお方がただ約束を交わしただけではなく、その約束を必ず守られる誠実な神であることを覚えていました。だから確かに今は自分の罪ゆえに悲しみを受け、戒めを受けることが当然だけれども、主は私を見捨てることは絶対にない、必ず変わらない愛とあわれみを示し続けてくださる、私の主はそんな恵み深いお方なのだ、と彼は信頼していたのです。そしてこの「恵み」こそがダビデの心に慰めを与えるのに十分で、また唯一必要なものだったのです。

私たちが試練を経験する時、苦痛を味わう時、心に慰めを与えるのに必要なものは、この同じ主の「恵み」です。ダビデにとってもそうであったように、私たちがどのような状況に置かれることがあったとしても、この「恵み」の持つ力は私たちに十分な助けを与えることができるのです。思い出してください。私たちが欲に従い、罪と罪過の中を生きていた時に、私たちを救い出してくださったもの、それは主の「恵み」でした。神に逆らいサタンの奴隷として、神の忌み嫌うことを行っていた私たちが生まれ変わらせてくれたものは主の「恵み」でした。私たちがどれだけ正しい行いをしたとしても、決してどうすることもできなかったその罪の罰を、私たちのかわりに贖ってくれたもの、それも主の「恵み」でした。自分たちの罪ゆえに御怒りを積み上げ、さばきにしか値しなかった私たちを救ってくださったものは主の「恵み」でした。救いはすべて主の「恵み」だったのです。エペソ2：4-5には

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——」とあります。救いのみわざはすべて神の「恵み」によって成し遂げられたのです。また救いだけではありません。救われた後、クリスチャンとして生きていく歩みを支える力も主の「恵み」でした。

思い返してみればさまざまな苦しみを味わい、迫害を経験し、ぼろぼろになっていたパウロはⅡコリント12：9－10の中で「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と言います。あらゆる苦難を味わっていたパウロを支えるのに主の「恵み」は十分なものでした。そしてこの同じ主の「恵み」がきょう私たちにも与えられているのです。私たちを罪から救い出すことのできたその神の「恵み」、また日々の生活の中で試練を経験する時も、私たちを支えることができる、私たちを支えるのに十分な神の「恵み」が私たちには与えられているのです。

ダビデは自分の罪、愚かさを認めていました。しかしそれ以上に主の「恵み」が大きいものであることを信じていたのです。そしてここに苦しみの中で彼は希望を見出したのです。私たちも同じです。喜びの時も悲しみの時もあわれみ深く誠実な神が私たちといつもともにいてくださる。私たちにとって何をするにも十分で必要な「恵み」が私たちには与えられている、この事実が私たちに大きな希望をもたらさないでしょうか？私たちに必要な、私たちに十分な、その「恵み」が与えられていると。私たちはこの変わることをないあわれみ深い神の「恵み」を覚えながら歩いていくことができるのです。この「恵み」に感謝しながら、いつもそれを覚えて歩いていくことです。

(2) 死にあっては主をほめたたえることができないから 5節

また、続けてダビデは主が自分を救う二つ目の理由として、死にあっては主をほめたたえることができないからと挙げています。5節「死にあっては、あなたを覚えることはありません。よみにあっては、だれが、あなたをほめたたえるでしょう。」と書かれていました。一体彼はここで何を言わんとしていたのでしょうか。「死にあっては」、「よみにあっては」主をほめたたえることができないとは一体どういう意味でしょうか。この箇所を私たちが理解するために、大切になるのが二つのことばです。それは「覚えることはありません」ということばと「よみにあって」ということばです。

まず「覚える」ということばは、単に意識して心の中で神様のことを記憶しておくという意味ではありません。これはそれ以上のこと、神様のなされるすばらしい働きの数々、偉大な力を心に覚え、主をほめたたえるという意味を持っています。また、「よみにあって」ということばは詩的な表現としてここに用いられており、神と人との交わりが断ち切られること、神と人が離れ離れになることを強調する目的で使われています。ここでダビデが言わんとしたことをまとめると、もし自分がこのまま苦しんで死を迎えることがあったとすれば、主との交わりが断ち切れ、もう二度とこの地上で自分が主の栄光をたたえることができなくなってしまふ。もっと簡潔に言えば、自分が死ねば、主のすばらしさをたたえる者が地上からいなくなってしまうとダビデは主に訴えるのです。

もちろん彼はここで何か神様と駆け引きをしようとしているわけではありません。自分が助かるために、自分の価値を示して神様、あなたには私が必要です、だから私を助けてください、そのような言い分をしているのでもありません。彼は別に死んだ後すべてが終わるとは考えていませんでした。むしろ死んだ後も彼は天で主を礼拝することができるということを知っていたのです。では一体彼はどうして、私が死んだら主を礼拝することができる者がいなくなってしまう、そんなことを言ったのでしょうか？それは、彼が自分のことではなく、主のことを考えていたからでした。彼の関心は自分のことではなく主だけでした。彼は自分がなぜ地上で生かされているのか、その目的をよくわかっていました。そして、自分が生かされている理由は神のすばらしいみわざをただ覚えるだけではなく、周りの人に伝え、ともに主をほめたたえることだと信じ、そのように生きようとしていました。それが彼にとっての生きる目的だったのです。だからもし自分が今ここで死ねば、それができなくなってしまうと訴えたのです。

ひどい苦しみの中にいたダビデは自分のことだけを考え、痛みから逃れるために死ぬことを主に望むこともできたかもしれませんが、しかし、何よりも神様がほめたたえられることだけを望んでいた彼は、主にこのように願うのです。どうか自分を苦しみから救い出してください。そうすれば、あなたが私に示してくれた恵みや愛をほかの人にもっと伝えることができると。あなたのことをもっとこの地上にあってほめたたえることができると彼は主に訴えたのです。自分が死にそうな中、苦しみの中にあつた彼が考えていたことは自分のことではなく神様がほめたたえられること、そして周りの人を気にかけていたのです。

彼は自分の様子がどれほど追い込まれていたのかをさらに続けて6-7節に記していました。「私は私の嘆きで疲れ果て、私の涙で、夜ごとに私の寝床を濡らせ、私のふしどを押し流します。私の目は、いらだちで衰え、私のすべての敵のために弱まりました。」と。彼は余りの苦しみで嘆き悲しみ、夜ごと涙を流し続けていました。病で起き上がることもできず、自分の寝床が涙で流されてしまうほど、彼は泣き続けていたのです。彼の目は生気を失い、そしてそんな彼に追い打ちをかけるように、彼は敵によって攻められていました。彼は肉体的にも精神的にも疲れ果て、弱り切り、まさに死が彼の身に迫っていたのです。もし皆さんがダビデと同じ立場に置かれたとすれば、どのように振る舞うでしょう？からだも心も疲れ果て、悲しみで涙が止まらない、そのような状況にあったとしたら、果たして私たちは彼のように神様をほめたたえること、神様のすばらしさを人に伝えたい、そのすばらしさを主とともにほめたたえたい、そのような思いを持つことができるのでしょうか？多くの場合、苦しめば苦しむほど私たちの視野はどんどん狭くなっていきます。そして周りのものが見えなくなり、自分のことにとられることがあります。今、自分が苦しい、周りの人のことよりも、神様に仕えることよりも今は自分のこと……と。悲しみが自分を支配すれば支配するほど、どれだけ主が自分にすばらしいことをなしてくださったのかよりも、自分の置かれている状況が思いどおりにならない、主が答えてくださらない、そのことに対する不満でいっぱいになったりしないのでしょうか？

もしそのようなことがあるのだとすれば、次のことをよく考えてみてください。あなたの神様はあなたが喜びにある時、また悲しみにある時、変わってしまうような神なののでしょうか？またあなたの神様はいつも心からの礼拝を受けるにふさわしい神ではないのでしょうか？私たちの神は変わることはない、誠実で恵み深いお方です。すべてのものが変わることがあったとしても、この神は変わることはありません。このお方の偉大さはどんな時も変わることがないのです。もちろん天で主にお会いして、主をいつまでも心から礼拝する、その特権が私たちには与えられています。私たちはそのことを期待しながら、その約束を信じて歩むことができます。しかし、今この地上に置かれ、命が与えられている間は私たちは決して変わることはない主をほめたたえ、主のすばらしい福音を、救いのみわざを宣べ伝えていく責任があります。ダビデは自分のいのちが脅かされ、苦しみの中にある時に、この主を礼拝し、そしてそのすばらしさを証することを求めて生きようと思いました。では私たちはこの責任に対してどれだけ熱心に歩んでいるのでしょうか？

3. 主の応答を確信する叫び 8-10節

そして最後の三つ目の叫びは8-10節の中に記されています。それは主の応答を確信する叫びです。8-10節「不法を行なう者ども。みな私から離れて行け。主は私の泣く声を聞かれたのだ。主は私の切なる願いを聞かれた。主は私の祈りを受け入れられる。私の敵は、みな恥を見、ただ、恐れおののきますように。彼らは退き、恥を見ますように。またたくまに。」と書かれていました。さて皆さん、今読んでみて驚きを感じなかったのでしょうか？あれだけ弱り切り、死の間際にあつて涙を流していたダビデの口調が突然変わっています。「不法を行なう者ども。みな私から離れて行け」と。一体彼の身に何があったのでしょうか？一体何が彼を苦しめる敵に対して警告を与える、そんな心へと彼を変えたのでしょうか？その答えがこう書かれていました。「主は私の泣く声を聞かれたのだ。主は私の切なる願いを聞かれた。主は私の祈りを受け入れられる。」と。彼が変わった理由は彼の心の叫びを主が聞き入れてくださったからでした。その事実が彼のすべてを変えたのです。

主はダビデの泣き声を聞かれました。間違いなくダビデは主の懲らしめを味わい、罪が責められ、心が悲しみとともに砕かれ、彼のうちに悔い改めをもたらしたことでしょう。そして主はそのような砕かれた悔いた心を喜び、その者に赦しを与えてくださるお方です。同じ悔い改めの詩篇である詩篇51:17に「神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれませぬ。」と書かれています。私たちが改めてここで覚えておくべきことは、主の懲らしめはその人をただ苦しめ、悲しみをもたらすものではないということです。主の懲らしめは痛みを伴う大きな悲しみを人にもたらし、罪と向き合わせることで心からの悔い改めへとその人を導くものだという事です。そしてそのような悔い改めた者の祈りを主は喜んで聞き入れてくださる。7-8節の間でダビデの身に実際に何が起こったのか、具体的に書かれていないがゆえに私たちにはわかりません。しかし、彼は悔い改めて自分の祈りを主が受け入れてくださったこと、またそれに応じて主が正しい報いを与えられることを確信していました。彼は主が必ずそのように罪を犯し逆らう者を退け、自分に苦しみをもたらししている敵を辱め、彼らに勝利されることを確信していたのです。この確信が彼の心に喜びと慰めをもたらしたのです。

そしてこれが今日の私たちにも与えられている確信です。主は確かに懲らしめを与えられるお方です。しかし、同時に私たちの泣き声を聞き取ってくださるお方だということです。余りにも心が苦しく、言葉にならない、涙を流すことしかできない、たとえそうだったとしても、主はその涙を通して私

たちの思いをくみ取ってくださる恵み深い方です。そして私たちが自分の罪を告白し悔い改めるのであれば、主はどんな罪でも赦してくださり、心砕かれた者の祈りを聞き入れてくださると。この主は今も昔も変わることはありません。だからこそ私たちが主の懲らしめを経験することがあったとしても、苦しみや悲しみに苛まれることがあったとしても、この主が必ず祈りを聞いてくださる、必ず私たちの祈りにこたえてくださるという確信を私たちはきょう持つことができます。この確信のうちに私たちは平安を持って歩むことができます。この先不安や恐れが心を支配し、からだは痛み、深い悲しみに襲われること、涙を流すことを経験することがあるでしょう。どうか覚えていてください。ダビデを救い出したこの主は、あなたをも救い出すことができるお方です。この方に不可能なことはありません。この主に涙をもって祈り、そして信頼することです。

○まとめ

さて、今朝は主の懲らしめを受け、悲しみの中にあったダビデから、そのような状況の中でどのような祈りを捧げることができるのかを見てきました。皆さんはこれまでにこのダビデと同じような経験をしたことがあったでしょうか？自分の罪の重さに涙が止まらない、そんな夜を過ごしたことはあったでしょうか？主の懲らしめを受けて大きな痛みを味わったことはあったでしょうか？もし、全くないと言われる方がおられるのであれば、この詩篇6：8を引用されたイエス様のことばによく耳を傾けてください。イエス様はマタイ7：22-23に「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」と言われました。

きょうのみことばから私たちが学んだように、もし私たちが本当に救われ、神の子どもとされているのであれば、必ず私たちは愛する父から訓練を受けます。その訓練は私たちが聖くなっていくために必要なものだからです。だからもし一度もないと言うのであれば、そんなあなたがイエス様の前に立つ時にかげられることばは「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」ということばです。ですから自分の信仰が本物かどうかをいま一度しっかり吟味してください。自分の罪を心から悔い改め、心を砕いて主の前を正しく歩むことです。

また、まだ一度もイエス・キリストを信じ受け入れていない方も同じです。どうか自分が聖い神の前にどのような存在かを考えてください。そしてこの方を自分の救い主として受け入れ歩み出してください。私たちが見た主の変わらない恵みはあなたのためにも用意されています。

そして最後に、今、主に喜ばれる者、聖さを追い求めて歩んでいる皆さん、そのまま続けて歩み続けてください。ある日、主はあなたを成長させるために愛によって懲らしめを与えることがあるでしょう。しかし、そんな中であっても、きょう私たちが見たように必ずそこには希望があります。祈ることができます。鍵はあわれみ深い主の恵みの力により頼むことです。ぜひともにキリストに喜ばれる者として祈りにおいて成長し続けていきましょう。